

vol.51-06 (通算 579号)

2021年9月号

# やどかり

2021年9月15日発行  
(毎月1回15日発行)1987年12月19日第三種郵便物認可  
発行人 公益社団法人やどかりの里  
代表者 増田 一世

〒337-0043 さいたま市見沼区中川562

TEL 048-686-0494

FAX 048-747-7030

URL <https://www.yadokarinosato.org/>

定価 50円(含会費)

## COVID-19が明らかにした精神科医療の課題

### 私たちはどう向き合うのか

2019年12月頃に発生した新型コロナウイルス(COVID-19)は、瞬く間に世界中へ感染が拡大した。現在まで、変異を繰り返しながら、さらに感染拡大が進んでいる。国による政策は、人々に自粛を求め、自粛する人々のさまざまな困難への対策はせいぜい弱だ。ワクチン接種の動きが進む中で、感染の再拡大となり、緊急事態宣言下のオリンピック・パラリンピック開催となった。全ての人たちの仕事に大きな影響を及ぼしているCOVID-19は、精神科医療の長年の課題を明らかにした。私たちはどう向き合っていくたらよいのだろうか。

大規模な集団感染(クラスター)を発生しながら、大きく報道されることのなかった精神科病院。COVID-19の感染拡大は、日本の精神科医療の抱える根本的な課題を浮き彫りにした。厚生労働省からの発表はないが、大阪精神医療人権センターの調査によれば、全国の精神科病院のうち145病院(全国の精神科病院1,054か所,2019年)で院内感染があり、陽性患者数4,610人、職員ら1,340人(計5,950人)、死亡患者126人という結果になっている(2021年6月10日現在)。

こうした事態を広く知らしめたのは、7月31日にNHK(Eテレ)で放送されたETV特集「ドキュメント精神科病院×新型コロナ」だった。2020年4月からCOVID-19感染者の受け入れを決めた都立松沢病院を中心に取材されたものだ。クラスターが発生した精神科病院から転院した患者たちの中には、骨まで達するほど悪化した褥瘡、何日も交換されなかったと思われる便の溜まったおむつ……そ

して、閉鎖病棟の中でさらに外から南京錠で鍵をかけられ隔離され、畳の病室の中央にポータブルトイレが置かれて過ごした、との患者による証言もあった。

この背景にあるのは、未だ残されている差別的な精神科特例(医師は一般科の1/3、看護師は3/4でよいという人員基準)である。クラスター化は、少ない職員配置、閉鎖的で換気不十分、密な状況という環境の中で防ぎようがなかったのではないか。日本の精神科医療の根本的課題が白日の下にさらされ、そして、番組内で語られた「身体に病気が起こった時、精神障害のある人が受けられる医療は、精神障害のない人よりも明らかに劣っている」という松沢病院の元院長の言葉は、精神障害のある人たちに対する偏見・差別の根深さを示している。また、「精神科医療は医療を提供するだけでなく、社会の秩序を担保している」と語る日本精神科病院協会の会長の言葉は衝撃だった。

COVID-19は、日本の精神科医療はどうあるべきなのか、私たちに重い課題を突き付ける。精神的不調は誰にでも起こりうる。特別な人の特別な病気ではない。障害者権利条約では、環境によって障害は重くも軽くもなるという。それは、精神疾患でも同様である。日常の暮らしを送りながら、治療が受けられ、必要な支援が届けられる、そうした社会の仕組みが必要だ。そのためにやどかりの里がやるべきことは何か。やどかりの里の50年の経験をどう生かすのか、問われている。